

2007年12月27日

中国の一次産品輸入の拡大は世界のインフレ要因か？

1. China Price ~ 中国は世界のデフレ要因であり、かつインフレ要因？

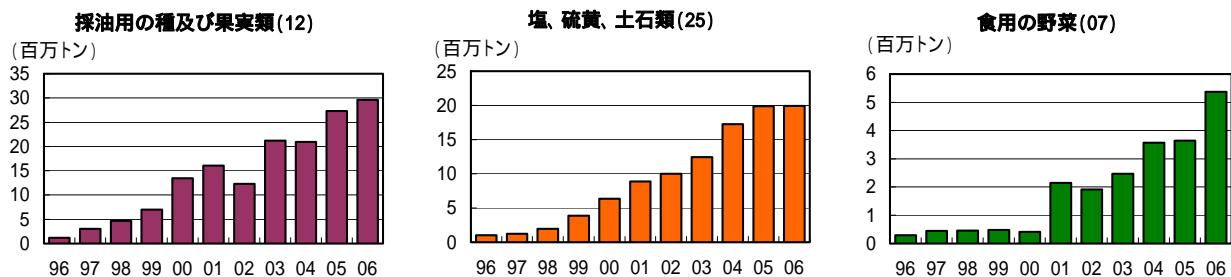
「中国問題の一つは、規模が非常に大きいため中国が輸入するものは何でも値上がりする一方、中国が輸出するものは何でも値下がりしてしまうことだ」¹との指摘がある。また、「中国の買いで価格上昇」あるいは「中国の買い控えて市況軟化」といった記事は新聞の商品市況欄の定番になったかのような印象さえある。

China Price といえば一般に低コストを武器に安値攻勢で世界中の市場を席捲する中国の工業製品価格のことを指すが、昨今、世界が注目する China Price といえば、中国の輸入拡大によって上昇していると言われる一次産品価格の動向にあるようだ。果たして中国は高成長を背景に闇雲に世界中で商品を買って漁って価格を吊り上げ、結果的には自分も高値で買わざるを得なくなるような「自らの成功の犠牲者」²となっているのだろうか。中国の一次産品輸入の動向についての分析をもとに検討してみた。

2. 中国の一次産品輸入の動向

まず輸入数量統計³をもとに中国の一次産品の輸入動向について見てみた。HSコード2桁分類ベースで2006年の輸入数量が百万トンを上回る17品目⁴について、1996年から2006年までの輸入数量の推移を見ると(図表1)、大豆を中心とする採油用の種及び果実類(HS12)の輸入数量がこの間に26倍、硫酸の原料となる硫黄を含む塩、硫黄、土石類(HS25)が20倍、食用の野菜類(HS07)が18倍、木材パルプ類(HS47)が10倍、鉱石類(HS26)が7倍、銅及び銅製品(HS74)が5倍となっている。同じ期間の中国の実質GDP成長率が年平均9.2%で実質GDP規模が2.4倍になっているに過ぎないことを考えると中国の一次産品輸入の急拡大ぶりがうかがえる。

図表1. 大幅に拡大する中国の一次産品輸入



(出所) World Trade Atlas

(注) 品目名の横の()内の数字はHSコード番号。

¹ Financial Times, August 15, 2007.

² Financial Times, May 22, 2007.

³ 米国 GTI 社作成のデータベース World Trade Atlas のデータによる。







⁴ 実際には 19 品目あるが本稿では 96 年以降、連続してデータが取れない有機化学品、穀物を除く 17 品目について検討した。

さらに具体的な品目（HSコード4桁分類）で見ても、アルミニウム鉱（HS2606）の輸入数量が同じ期間43倍、大豆（HS1201）が26倍、石炭・練炭・豆炭類（HS2701）が12倍、鉄鉱（HS2601）が7倍、原油（HS2709）が6倍、クロム鉱（HS2610）が6倍と急拡大しており、中国の輸入拡大がこれらの商品の価格押し上げ要因となっている可能性を示唆している。

3. 輸入数量と輸入単価の動向

一次産品の性格から考えて中国の需要拡大に合わせて年率2割から3割で供給を拡大し続けることは難しいと考えられる。そこで次に急テンポでの輸入の拡大が輸入単価の上昇となって中国自身にはね返ってきてないかどうかを確認してみた（分析の対象は上記2桁分類17品目と中国統計年鑑に主要輸入品目として取り上げられている4桁分類11品目の合計28品目）。

1996年の水準を1として品目ごとに輸入数量並びに単価の変化をプロットしてみると⁵、以下の3つのケースに分類できる（3～5頁、図表2～4）。

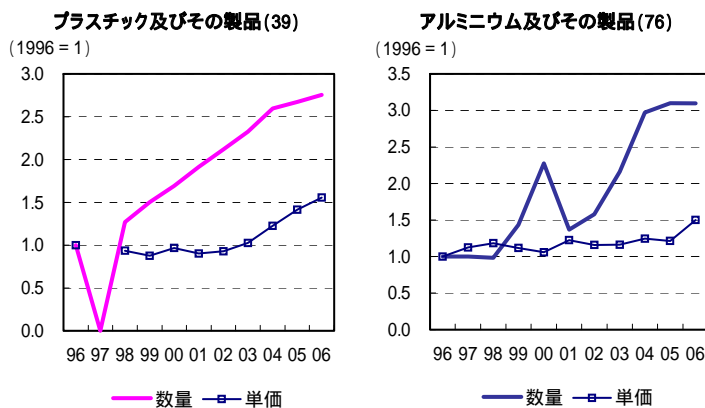
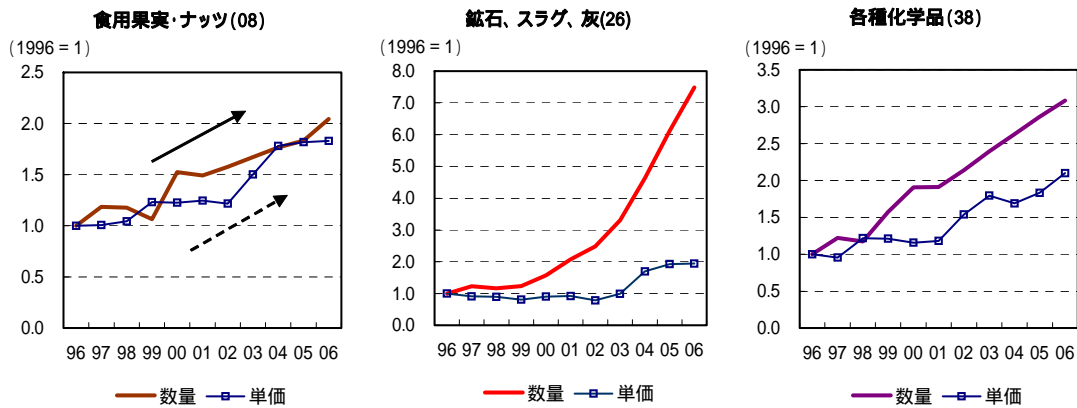
	数量	単価		
ケース1			輸入数量の拡大と同時に輸入単価も上昇	10品目(図表2)
ケース2			輸入単価の上昇を受け数量減少ないし拡大頭打ち	8品目(図表3)
ケース3			輸入数量の拡大にもかかわらず単価横ばい	10品目(図表4)

鉄鉱、原油をはじめとする<ケース1>が冒頭の「中国が輸入すると値が上がる」ケースと言えよう。<ケース2>は<ケース1>とは違い、実は中国が「堅実な購買者」であることを示しているケースである。特に特徴的なのが飼料用調製品（HS2309）の輸入動向で輸入単価が低い年には輸入数量が拡大し、逆に単価が上昇すると数量が減少している（4頁図表3）。

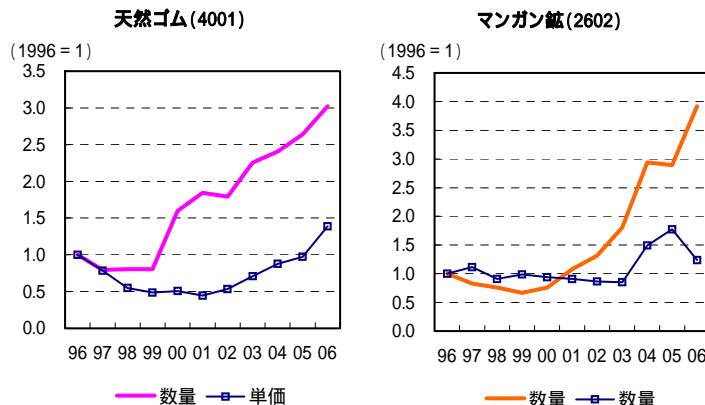
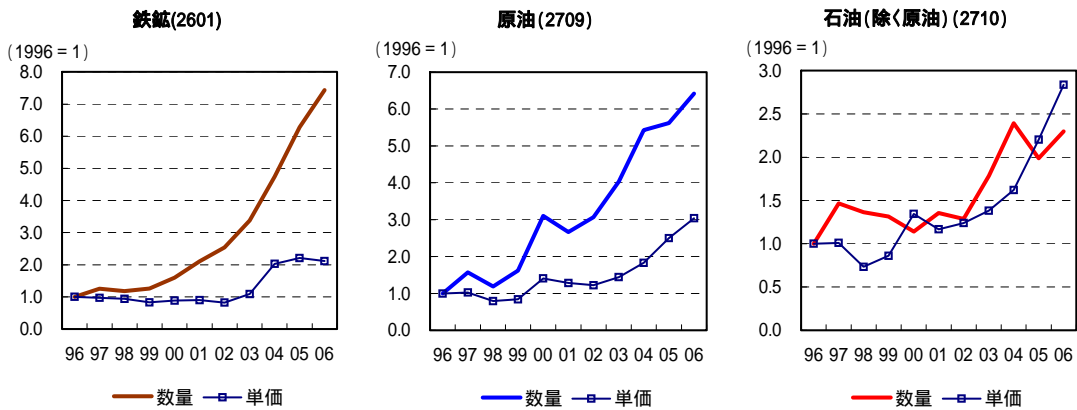
注目されるのが<ケース3>である。野菜や大豆など中国の輸入数量がこの10年間に20倍以上に拡大しているにもかかわらず、輸入単価はほとんど上昇していない（5頁図表4）。この背景として中国が安く調達できる国に供給先をシフトしていることが考えられる。「堅実な購買者」であるという意味では<ケース2>と同様であるが、<ケース2>では中国は「価格受容者（price taker）」にとどまっているのに対して、<ケース3>では中国が大口需要者という立場をもとに価格設定に影響力を持つという意味で「価格設定者（price setter）」に転じていると考えられる。

⁵ ただし、鉄鉱（HS72）は統計の制約上、1997年=1でプロット。

図表2. 品目別輸入数量と輸入単価の推移 <ケース1>
HS二桁分類

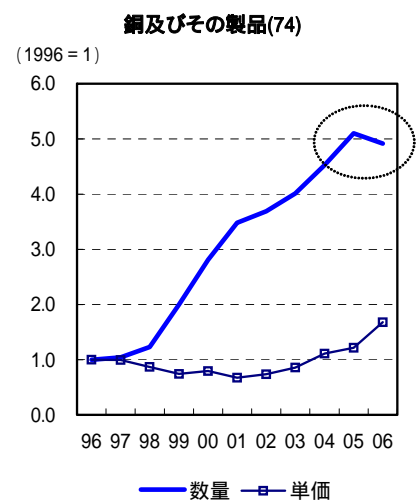
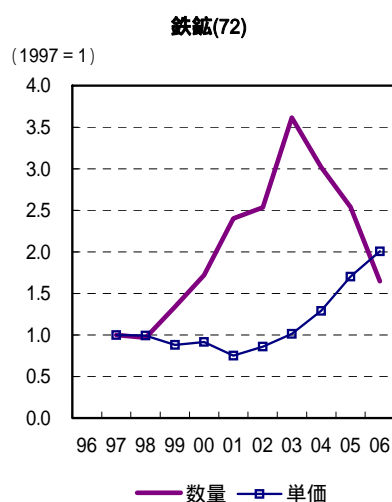
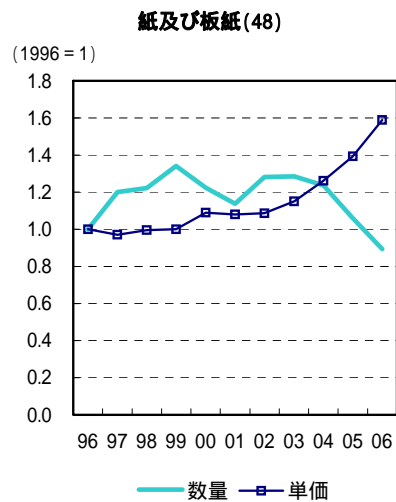
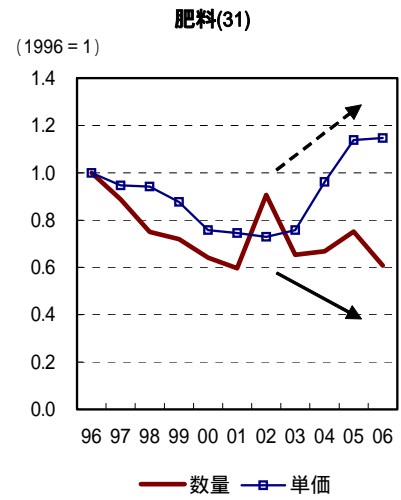
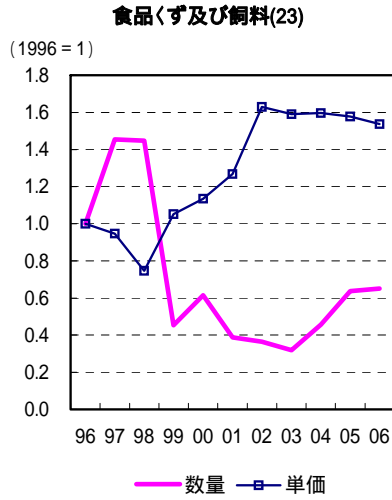
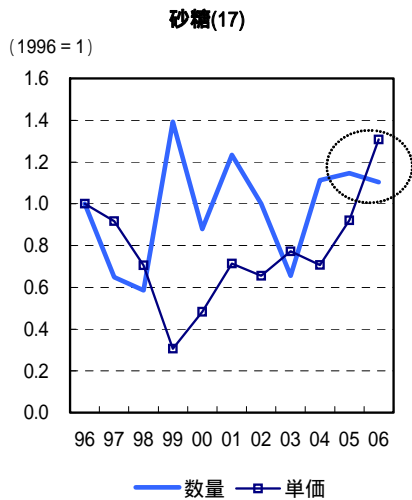


HS四桁分類

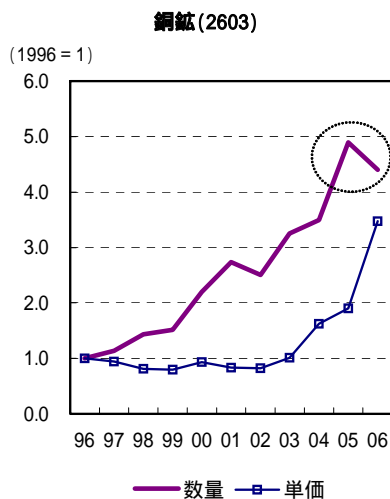
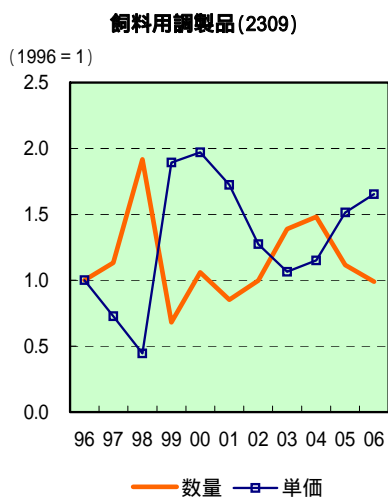


(注) 品名の横の()内の番号はHS分類コード。
また図中の実線矢印は数量の破線矢印は単価のトレンドを示す(出所)World Trade Atlas

図表3. 品目別輸入数量と輸入単価の推移 <ケース2>
HS二桁分類

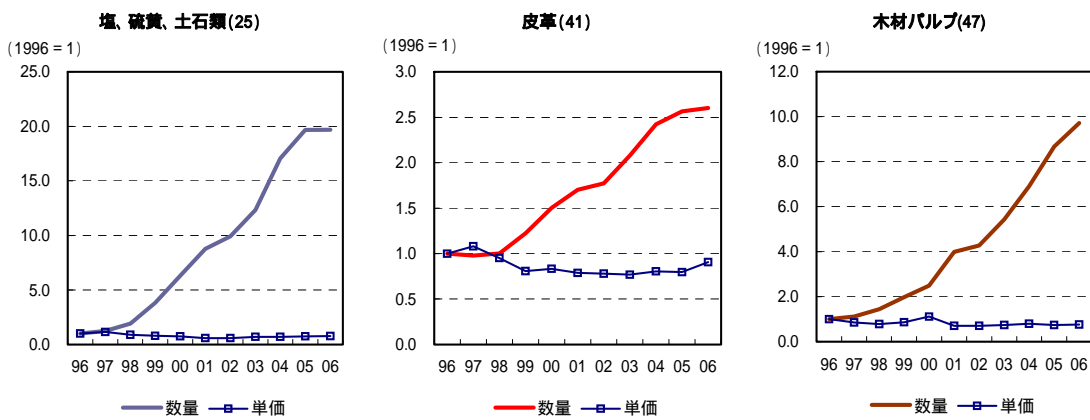
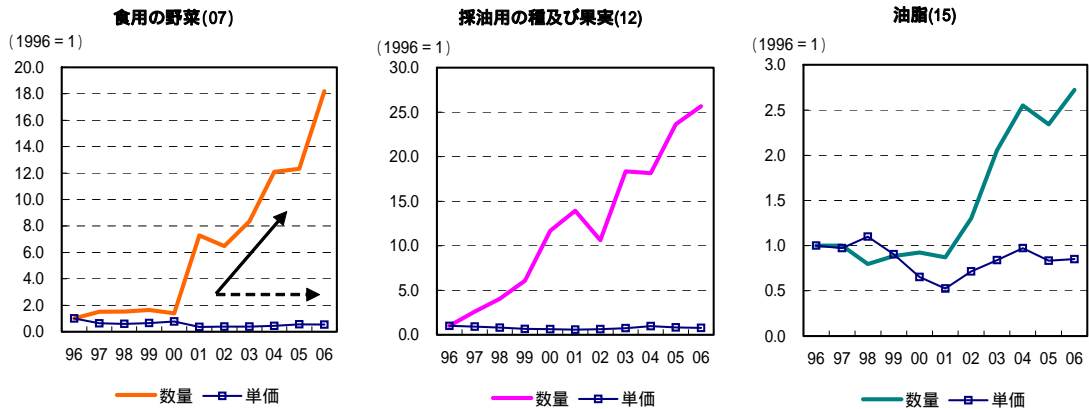


HS四桁分類

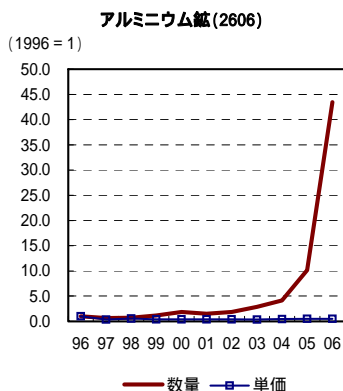
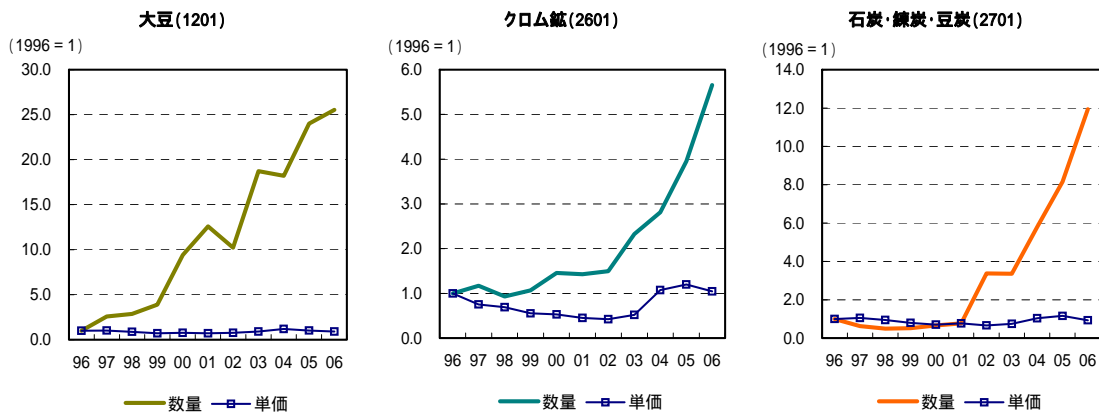


(注) 品名の横の () 内の番号は
HS分類コード。
また図中の実線矢印は数量の
破線矢印は単価のトレンドを示す
(出所) World Trade Atlas

図表4. 品目別輸入数量と輸入単価の推移 <ケース3>
HS二桁分類



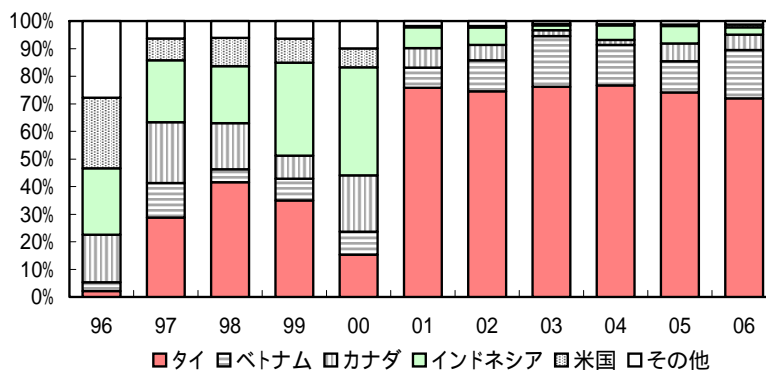
HS四桁分類



(注) 品名の横の()内の番号はHS分類コード。
また図中の実線矢印は数量、
破線矢印は単価のトレンドを示す。
(出所) World Trade Atlas

例えば、中国の野菜輸入の主要相手国別シェアの推移を見てみると（図表5）、2001年にタイのシェアが一気に拡大したことがわかる。これは2001年のWTO加盟を前に中国が2000年3月にタイと相互協定に調印し、タイからの輸入品の一部について関税の引下げ、並びに農産品の輸入枠拡大を承認したことが直接の要因となっている⁶。実際、関税引き下げもあり2001年以降、タイから輸入される野菜の単価は競合するベトナムやインドネシアを下回っており、中国は二国間相互協定を通じ安定した価格での野菜輸入確保に成功していると言えよう（図表6）。なお、こうした中でタイの野菜輸出における対中依存度は近年、大きく高まっており、2006年には輸出野菜の約9割が中国向けとなっている（図表7）。

図表5. 中国の野菜輸入～主要相手国別シェアの推移



(出所) World Trade Atlas

図表6. 中国の野菜輸入～主要相手国別輸入単価の推移 (\$/ton)

年	野菜輸入					
	全体	タイ	ベトナム	カナダ	インドネシア	米国
96	259	341	153	245	166	314
97	166	103	105	245	90	292
98	158	105	136	214	107	295
99	171	101	116	211	101	474
00	199	89	97	179	87	609
01	98	77	85	171	92	798
02	101	80	89	188	90	949
03	98	81	90	195	94	1,010
04	113	100	95	199	116	1,082
05	144	127	123	197	130	955
06	141	124	128	198	139	524

(出所) World Trade Atlas

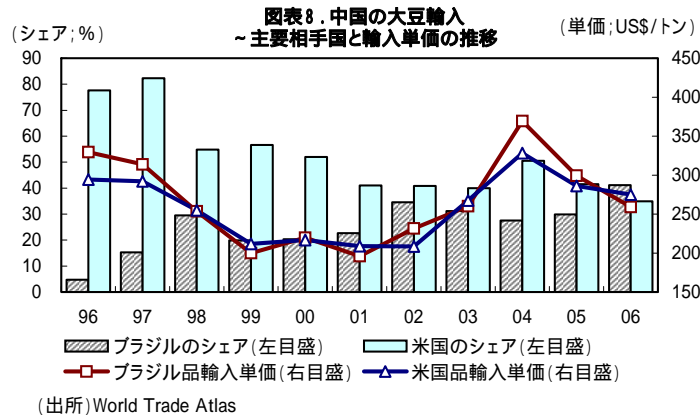
図表7. タイの野菜輸出(量)に占める中国のシェアの推移 (%)

年	中国	スペイン	日本	マレーシア	ベルギー	その他
98	5.3	5.4	2.2	0.6	0.8	85.8
99	4.2	12.0	1.4	0.7	1.9	79.8
00	2.0	14.5	1.9	0.9	0.8	79.9
01	35.0	11.4	1.2	0.6	0.5	51.2
02	48.0	7.6	2.0	1.0	1.2	40.2
03	47.7	12.5	1.7	1.3	2.9	34.0
04	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.
05	85.3	6.5	2.1	1.9	0.0	4.2
06	86.1	4.0	1.6	1.6	1.5	5.2

(出所) World Trade Atlas

⁶ 時事 web ニュース 2000年7月3日。

また、大豆については中国が価格動向を見て米国とブラジルという二大大豆輸出国からの輸入量を適宜調整している様子がうかがわれる（図表8）。なお、2006年にはブラジルの大豆輸出における対中依存度が4割強にまで高まっており、今後、中国が大口需要者として価格交渉力を高める可能性が考えられる状況にある（図表9）。



図表9. ブラジルの大豆輸出に占める中国のシェア (%)

	中国	オランダ	スペイン	イタリア	ドイツ	その他
97	3.6	51.8	9.7	2.5	5.3	27.1
98	10.2	32.0	10.3	3.6	11.8	32.2
99	7.0	33.9	15.9	4.9	9.6	28.8
00	15.5	29.9	10.3	3.8	9.1	31.3
01	20.4	21.2	8.7	4.6	10.0	35.1
02	25.9	18.4	7.6	3.3	9.9	34.8
03	30.7	18.4	7.9	3.9	11.1	28.0
04	29.5	18.5	8.0	4.5	8.5	31.0
05	31.9	22.5	9.3	6.0	4.2	26.0
06	43.1	15.0	7.5	4.2	4.2	25.9

(出所) World Trade Atlas

4. 輸入大国・中国

輸出の規模と伸びに比べて輸入の規模と伸びが小さいことから、これまで中国といえはその輸出動向が主に注目されてきた。しかし、世界景気の拡大持続と一次産品価格の上昇を背景に世界的にインフレ傾向が顕著になる中で改めて輸入大国としての中国の存在も注目されるようになってきている。

では「中国が輸入するものは何でも高くなるのか」と言えば、＜ケース1＞に見られるように一部の品目でそうした傾向が見られることは事実である。しかし、＜ケース2＞や＜ケース3＞のように中国が輸入量の確保と同時に価格の安定も図っているケースも少なく、答えは必ずしもそうではない、ということになる。また＜ケース1＞の品目が今後、＜ケース2＞に転化、すなわち価格上昇を嫌気し、輸入数量が絞られる可能性も考えられる。

当面、中国は高成長を維持する見通しであり、その需要は今後も底堅く推移すると見られる。中国に対して競争力のある価格で商品を提供できる国は中国の高成長の恩恵を受けることができると言えるだろう。ただし、中国に対する依存度が高くなると「価格設定力」も中国に移ってしまう可能性がある点には注意が必要だろう。

調査部 野田麻里子(mariko.noda@murc.jp)

本レポートに掲載された意見・予測等は資料作成時点の判断であり、今後予告なしに変更されることがあります。